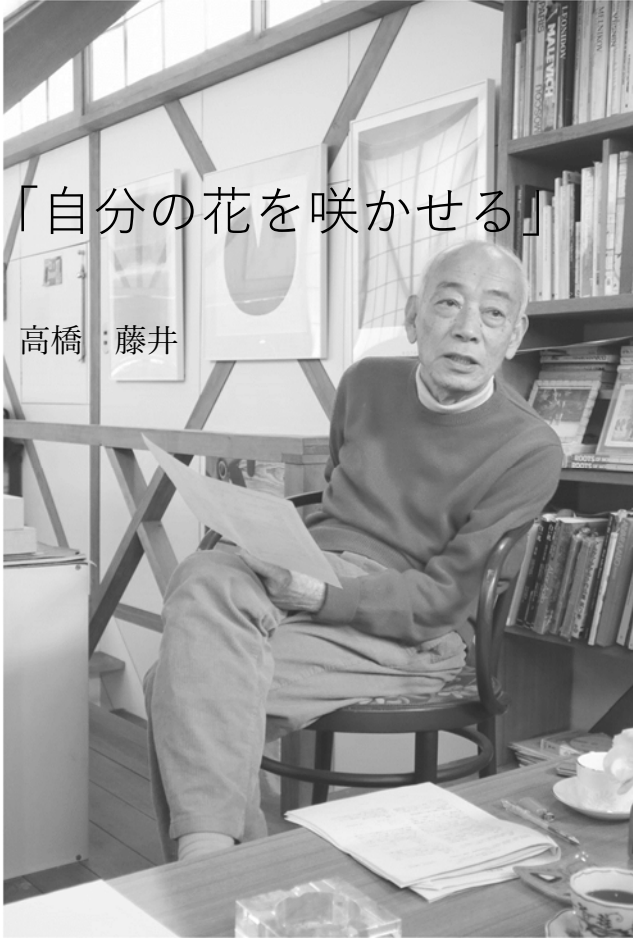
08 富永譲「自分の花を咲かせる」

聞き手：小野　瀬川　高橋　藤井



自分の経験を投影し、広げていく

――印象に残った作品も伺いたいのですが、卒業設計に限らず富永さんについて、いつも聞けないようなこともお聞きしたいと思っています。

富永　前回ものすごく否定的なことを言った。去年の卒業設計について野沢さんと一緒に喋って、こんな事やってちゃだめじゃないみたいなことを言ったけど、今回はそういう感じは全くないです。去年そういうことをしゃべったから良くなったのか、レベルは高いですよ。それは西沢さんも言っていたよね。ここ5年ぐらいの間で一番いいなんて。全体のレベルは高いと思う。力作も多かったと思うけどね。

――最初に今年の卒業設計で印象に残った作品などあれば、教えていただきたいと思います。

富永　林くん（p4~9）のは一票も入らなかったけれども、僕はいいと思いました。小さい小学校を作って周りの住宅の既存の庭なんかも取り込んで、地域の中に溶かし込んで行くような、それを地形を使ってやっているのは、都会の生徒数からすると難しいかもしれないけれど、あの小学校ぐらいの程度だったら、ああやって勉強して育っていくってのはいいと思うんですよ。

日本に文部省の学校の制度が入ってきたのは明治以降だけれど、江戸時代とかは藩校とか屋敷とか塾といった場所で昔、子供は勉強していたわけです。そこでただカリキュラムをこなすのではなくて、明治政府の要人をつくるような、才能を持ついい人材が出たわけですよね。だからああいう形での学校というのはあり得る。それが尾道だったら大きい敷地は無いですから、小さい敷地を繋ぎ合わせて作っていくという構想はいいなと思った。デザインも僕は悪くないと思う。だけどもうちょっと街に溶け込んでいるというところを、既存の家々の中に自分の計画をモンタージュするとかして見せていくと、すごくインパクトがあったと思うんですよ。街の中にストンと溶け込んで入っていて、ボリュームも小さいし。だからこれはどうして一票しか入らなかったのかというのはハテナですね。僕はすごくいいと思った。

それから小野さん（p68~73）の。横須賀の街に似ているなと思ったんですよ。僕は横須賀の救急医療センターを設計したりして横須賀の町の性格というのはよく知っていて、人口がどんどん減っていって地形的な問題もある。要するに交通の便が悪かったりとかバリアフリーだとか。あなた（小野）がやってる横浜の敷地もそういうところでしょう。便が良くてマンションが建っていくような敷地ではなくて、公共施設もなくてというような。だからそういう丘陵地の一番上の見晴らしの良いスペースに一つの拠点を作っていくことにはとても納得がいくし、デザインもいいなと思ったんですよね。

小野くんはもともと僕が3年で指導した時にも、ラーメン構造で全部作っていて。だけど僕はああいうことをきちっとやれないとだめだと思うんだよ。変なことやる人っていうのは最初から妙な野心を持っちゃっているわけ。最初に学ぶ人の姿勢ではないと思うんだよね。学生だったらさ、やっぱり学んでいこうっていう姿勢があってしかるべきで、だけど君（小野）は最初、知っている自分の手の内にあるボキャブラリーというか、スパンとかそういうものの中で物を解決していこうとしていた。そういう人って元々建築的なんだよね。自分の扱える領域の中で物を解決していって、次にそれを徐々に広げていくっていう。**建築家ってそういう自分の経験を投影して広げていく人なんだよ。**僕の大学の同級生の中で一番優秀な人はそうやってだんだん成長してゆく人でした。そういう意味では君（小野）の作品を見てて、3年後期の中川エリカさんの課題でも僕の課題でも、すごく建築的な感じがしたわ

けね。こいつ建築家になるんだろうなっていう感じがあった。いつかなんかやるだろうなっていう感じは持っていたから、今度の卒計では徐々に前よりも地味じゃなくなってきた。かつ全体性を持っていましたよね。だからちゃんと成長していることを評価しました。

アーキテクチャリティ＝建築が示せる空間の構想力

富永　それから毛利くん（P140~145）もちょっと変わった人だけれども、3年の作品を見て彼の作るものってやっぱり建築的なんだよね。なんか自分の理解できる範囲の中で色んな事を構築しているわけ。それを感じたのは、図書館の課題でも真ん中にズドンとガラス貼りの書庫を入れて、その周りでいろんなことをやった。書庫の中に入れるわけではないんだけれど、入ると吹き抜けのところにどーんと書庫が建っていて、周りを巡るように閲覧室とかがある。書庫のタワーとの間に距離があって、未熟だけれども建築の持っている力というか、建築っていうのが古くから人間の技として歴史の中で引き継がれてきた、ある種の形式を持って、一つの**アーキテクチャリティというか、建築メディアでしか出し得ないような形式性だよな。**ある種の人間に対しての形式性、そういうようなものを持っているなと。何か作ってきても細かいスタディをしてきても、そういうものがある人だなぁと思ったわけ。建築の形式性に対して敏感な人だと思った。

　決して器用ではないかもしれないんだけれど、三つの小中高という自分の通った学校を、特別教室とかを中心にして商店街のように作って統合して、その統合した通りの奥に庭があって、それが大事なんだけれど、庭という距離を持って、その奥に教室群というか小学校の教室、中学校の教室がある。小さいキャラクターのある庭を五つぐらい作って繋げているっていう筋は、結構建築的な構想なんだよね。なんかこう考えている器が大きいなっていう気がした。ごちゃごちゃした現状がどうのこうの、って話ではなくて、全体性を持った構想をする人だなと思った。デザインはまだ全然未熟だと思うけれど、広場とかは、もっとあんな感じじゃないんだろうなっていう感じはするし。それぞれの5つの庭の特性も弱い。機能は別々なんですから。食の庭。スポーツの庭は広くないと駄目だろうとか。そこは未熟かもしれないけれど、建築家というのが世の中で役に立っていくのはああいうような視点を持てる人、アーキテクチャリティって言うんだけど、建築性っていうことが大事であって、それは他の分野でも建築しかやらないことなんだよね。そのところを職能として自分で成立させていかないといけないんだよな。そこに注意が集中していないと、ただでかい模型作って面白い面白いってやっている人じゃ困るわけだ。そうじゃなくてもっと図面で考えて、頭で考えて構想してっていうさ。

　建築家ってヨーロッパではそういう人なんだよね、レムコールハースとか社会構想とは言うけれど、社会をはじめから構想する人ではないですよね。人間が生きている空間を構想する人だよね。社会の予測なんてどうなるか分かんないんだよ、実は。建築家はイデオロギーで主導する立場にある人じゃないんだよ。それは経済とか制度とか政治とかが強力な力で誘導していく中で建築は生成していて。建築が社会をつくるなんて、ものを作れば制度が変わるとかそういう問題じゃないですからね。だからいろんな中で空間的な価値っていうものの大きさに対して敏感な人が建築家であるべきなんだよね。調査をして分析して、そこの社会の虚をついてやればいいっていう感じで考えているかもしれないけれど、それは建築の本筋ではないですよね。でも今の若い建築家はみんなそこでしか生きられないと考えているわけでしょう。ドミニクペローとかさ、ああいう構想力を持った人が生きられない社会に日本がなってきたのかな。これから建築家の建築的な構想力が世の中を席巻する時代になるとは考えられないし、高度資本主義の成れの果てみたいな感じになってきた。金が万能でなんでもお金に換算するような社会っていうのができてきて、僕も君たちもそこで生きていくんだけどすごい大変だなっていう気がするんだよね、建築家やってて。だけど建築を勉強するなら、建築っていうものの力ってのは信じてくれないと困るなぁと思うわけです。特に卒業設計だとしたら何の制限もないわけだし、別にそこでお金を儲けようってわけではないからね。だから空間の構想力みたいなものを提示して欲しいわけだよ。純なものを見たい訳だよ。だからそういう意味では毛利くんのもいいなと思った。

　それから伊波くん（P38~45）のバス停の家かな。あの人のはやっぱりお話を作ってるわけ。楽しいお話を、こんなこと実現しないだろうなとは思うけれど、ただそれが構想力だよね。お話を作って、いいなっていうものを作れる力っていうのは。現実感の中に立脚してその話を作って、それなりの力作なんだよね、それぞれ（のバス停）が。それがオーソドックスなやり方であって、もちろん卒業設計って全部お話ですからね。自分で設定したテーマでやる。だから頭を垂れるような寂しいお話は聞きたくないわけだよね。やっぱりもっと自分が考えた空間の構想力みたいな物を示してほしいわけだ。

　この人は力があるし、力作だなという感じがしたんですね。一見リアリティがあるといえばリアリティがあるだろうな。バス停ぐらいのスペースをちょっとした木造架構で作ってるんだから。だけどリアリティっていうことはよく考えないといけないんで、リアリティあるっぽく作ればリアリティがあるわけじゃないからね。社会のなかでのリアリティっていうのはあくまで非常に厳しいもので、本当に考えた

ら。**僕は作ってる人の頭の中でリアリティがあるか、っていうことが重要だと思うんですよ。**自分の中でそれに惚れ込んで、「あ、こういうんだったらいいだろうな」っていうふうになっているのか、それとも「これがリアリティあるっぽく言えるんじゃないかな」って思って作っているのかっていうことが分かれ目であって、お話を作る限りは自分の夢を語って、その世界に引き込んでくれればそれがリアリティがあるんだから、その人にとって社会的なリアリティはもともと卒業設計では一切試されないわけです。これから50年なり仕事をして、それを何らかの形で自分の中のリアリティを実現させていくようなものでしょう。そういう意味でこれが必ずしもリアリティがあるとは言えないけれど、彼が描いているのはあまり嘘がないなぁというか、本心で「こんな街になったらいいだろうな」と思ってやってるところには嘘がない。それが現実性があるかどうかっていうのは別のことなんだよ。あるっぽく見えるけどね。あそこの所のバス停改造すればできるんじゃないとか。だけどそんなことはないんだよ。現実の世界ってのはそういうもんじゃないから。

あといいなと思ったのは阪根さん（p78~85）かな。あの人もちょっと変わってるね。面白いセンスを持ってるよね。それはこどもセンターを指導した時から感じたね。センスっていうものがあるなという感じがしたわけ。真鶴って僕はまちづくりの審議委員とかもやってるからよく知っているんだけど、彼女のも力作だし、擁壁とか家の段差を利用して、やっているようなところもいいなあと思いましたね。作品としてはまだ未完成と言うかな。センスを買ったのかな。中川エリカさんなんか好きそうな感じだよね。感覚が似てるよね、ああいうちょっとアナーキーな感じで。そんな5つぐらいはいいなと思ったね。

卒業設計は、自身の主体の表現

富永　瀬川さん（p10~17）のはすごく人気があったんだよね、大規模店舗に附置義務を作るというのは社会的な提案で、積極的だっていうことなんだよねきっと。要するに横国の指導方針からいくと、社会に提案をしてるっていう事なんだと思うよ。だから現実的な提案だって言う評価だと思うんだよね。

だけど本当に現実的かなっていう感じがする。そういうことをして本当に社会が動いていくのかなっていうか。いわゆる政治だよね大規模店舗っていうのは、要するに効率の良い金儲けのためにやってるわけだよ、土地の安いところにドーンと建物を建てられるような法制度整備をしたわけだよ、日本の高度成長期に。それで田んぼの真ん中にドカーンとイオンとかが登場してきたわけだよ。それを災害拠点にするとか、そういう附置義務として塔を作ってくれとかいろんなものがあったよね、屋根とかスロープとか。そういうふうに制度を使って強制していく、それで変えていくっていうことは、後ろ向きだし、人間的な街をつくり得ないと思うんですよ。目の前に当人が居るからハッキリ言うけど、これからああいう制度をやって良くなるかっていうと、僕はそういうことに対して疑問を持っているんだよね。言葉は悪いけれど現実性があるかのごとく見せているけれど、僕は非現実で気味が悪いし、悪夢だと思うんですよ。他の先生方がすごく評価して票を入れているから、そうとは言えないかもしれないけれど、そこを間違っちゃいけないと思うんだよね。その人の中で、本当にこれが「いいないいな」というふうに追い詰めていったものではないという感じがする。社会っていうものを見据えて、ここのところにこういう提案すればいいんじゃないかっていう話なんだよね。だからあなた（瀬川）の主体っていうものが入っていないわけ、その中に。**あなたが考えることの「こうしたい」という主体が、卒業設計では特に大事だと思うんですよ。**その人の良いところも悪いところも、全部出ているような代物なんだよな。後で見ると。

僕がちょっと講評でも言ったのは、それが政治的なお話であってスロープ作ったりシェルター作ったり塔を作ったりするのはいいんだけれど、あなた（瀬川）の中での一貫性っていうか、現実的だっていうことによりかかってはいけなくて、あなた自身の頭ではこういう風にしたいとかさ。それからスロープと塔の関係だってあるじゃない。妹島さんに塔とスロープと何かを作らせれば、絶対に「妹島だ！」っていうようなものを作るよね。だからデザイナーとして建築家としてやっていくのなら、その人のセンスっていうものが、いかなることをやっても投影していなければいけないっていうことを言ったわけ。そうしたら藤原徹平先生は「それはそうとも言えないんじゃないか、違うものがいっぱいあるのがいいんじゃないですか」って

言ったけれど、それは違うんだよ。それはイオンの人と西友の人が違うデザイナーがやったら違うものにはなるよ。違うふうになるから違ってもいいんだって言う話は、それは成り立たないんだよ。現実は主体がみんな違うから、それぞれでやっちゃっていいんじゃないって感じで、現実ってこんなもんさって感じになっちゃったら僕は良くないと思ったし、卒業設計である限りは瀬川さんのセンスというか、「こうありたい」というものがそこの中にあって、それはへんてこりんな塔でもいいけど、一貫したものであって。それが現実の社会の中で否定されることはもちろんあるわけだよ。一人の人が全部やるわけじゃないから。それが否定され得るだろうっていう予測のもとで、やっちゃったら、それは卒業設計じゃないと思うんだよ。という厳しい評価を持ったわけ。だから僕は絶対に入れなかったんだよ。厳しい言い方かもしれないけれど、僕は卒業設計についてそう思っているわけね。だから**その人自身のリアリティってものがどこまであるかってことが問われているので、あくまでその人の主体の表現なんだよ。**社会は背景にあるが社会の表現じゃないんだよ。社会を私は表現しました、なんていうのはそれは明らかに嘘ですよ。4年生の社会もまだわかってないような人がそんなことは必要ないんですよ、と思っているわけ。

だからその人が信じてるものっていうのをちゃんと出してくれて、それがその人の夢であろうとなんだろうと、その人の中でリアリティのあるものなんだろうなって。それが社会となんか接点を少し持っていれば、いいんじゃないかなっていうことが、僕が卒業設計に対して考えていること。最終的に、あなたがたが30年後に自分の卒業設計を見てみて、「俺ってこんなことを考えていたんだな」ていう感じになるんだろうね。恥ずかしいんだよね、だから人に見せたくないんだよね。こんなことにこだわって嫌なやつだよなーっていう風になる。だからそういうところが出ているものじゃないと、意味がないだろうなって思ってるわけです。これは僕の考えです。他の人はそうじゃない評価を与えているからそれはそれでいいんですけどね。

やっぱりなんか一生懸命やった人が評価されてるよね。久原さん（p100~107）っていう人のもいいと思ったけどね。僧侶の。これも非常に手堅いというか、着実な案だと思ったね。街がもうちょっと元気になるのかなと思ったけれど、割と手堅い感じで平凡な感じがしたな。あまり起伏がない感じで。だけどこれもすごい力作ですね。すごく力がかかってるよね。

計画の範囲を見極める

富永　藤井さん（p120~127）のは良かったけれど、あの提案のバックグラウンドを説明できてないような気がするんだよね。プレゼンなんかはすごく良かったと思うよ。型破りでさ。エネルギーがあっていいんだけど、ただ全体のプログラムをちゃんと審査員の人は読めてないと思うよ。僕は途中で藤井さんに相談されたからある程度は知ってたんだけど、ちょっとコミュニケーションがうまく取れてないというか、前提条件があまり…。ちょっと手に余るテーマであって、力の入れ方も分散しちゃって。雪利用と、風景の問題と。藤井さんの中での風景だけではリアリティが無い、裏付けをなんか作らなきゃいけないと思っていた節があるよね。雪利用のところもいろんなことを言っているけれど、本当に雪利用をする人はそんなことしないよって講評で言われちゃったじゃない。ああいう自分の知らないようなことを、それっぽく社会的な位置づけをするために利用して、都合いいようにやっちゃったのがあんまり良くないんだよね。雪利用の話なんて難しい話じゃない。それ自身でもしリアリティを得ようとしたらえらい複雑で、計画どころの話じゃなくなるんだよね。雪国の雪はどうしたらいいかみたいな話になっちゃうから、卒業設計でやるテーマとしてはあまりにもワイドレンジだったんだね。

やっぱり審査員の人たちはよくわからなかったと思う、説明されても。藤井さんは理解してってもあの短時間の中であの街が置かれている状況とかもよく分からないし、みんながそこに行っているわけじゃないから、あの場所に。模型見ても分からないし、だからちょっとコミュニケーションがうまく取れていない感じがしたよな。

彼女（藤井）はすごく能力のある人だというふうには思っているわけ。僕は3年の時から見ているから。馬力もあるし。自分で捉えられる領域のプロジェクトをやればよかったなと思うんだよな。デザインの魅力というものも持っている人なんだよね。面白いものとか interesting なスペースとか、そういうものを作れる人なんだけど、そういうものが一切発揮されないような大風呂敷を広げちゃったから、自分でも収拾できなくなっちゃってるよね。雪の利用とかいろんなことをやったから、何をやったのかわからなくなっちゃったわけよ。大きい景観的なことをやってるんだけど、どこで分裂しちゃったのかな。だけどそういうのがいいんだよ、**卒業設計は失敗してもいいんだよな。自分がこういうようになっちゃうんだなっていうことが分かれば、それはそれでいいわけだよ。**卒業設計で一番だったからって見込みがあるわけじゃないからね。注意してね(笑)。あくまでトライアルですからね。

プレゼンは皆さん良かったですよとても。卒業設計らしい熱気があった。西沢さんもいいと言ってましたね。卒業設計っていうとでっかい模型を作るとか、そんなじゃなくてその人がやろうとしてることが、図面や絵を描いたりして伝わってこないとダメなんだよな。

自分のなかに「咲かせる花」があると信じること

富永　「〇〇の方」っていうのをやった南さん（p114〜119）もこれからどうなるのかなっていう感じだよね。建築以外にも興味があると思うよ、彼女は。面白いものは持ってる人だなってことは分かってるんだけど。ただそれを形にするには、元々とても難しいテーマを選んでる。ただそれはそれでいいんですが。卒業設計って自分で興味あることをやればいいんだ。難しければ挫折するわけだから。

ただやっぱり大学で学ぶっていうことは、いろんな方向でトライアルをしてみて、自分の適性を知るってことなんだね、一番大事なことについて。自分が何が好きで何をやれば一生悔いがないのかっていう、自分の本性みたいなものを、やってるうちにわかってくるはずなんだよね。大学ってそこのところをいろんな人と付き合ったり共に学んで、自分がどういうことに向いているのかということを知るような場所なんだと思う。それが大切なんだ。だから植物で言えば自分の根みたいなものだ。みんなそれぞれ生まれつき違うんだよね。**自分のなかに「咲かせる花」があるということを信じることだ。そういう自分をしっかり掴んでる人が、成長するんだよね。**

妹島和世さんも彼女が一番こだわるところと、西沢立衛さんのこだわるところとは全然違うよね。妹島さんは非常に数学的で厳密ですよね。西沢さんはやっぱり生命的な曲線を使ったり、ニーマイヤーとかああいう感じですよね。妹島さんだと曲線を使ってもそういう感じにはならない。非常に数学っぽくて厳密ですよね。科学者のような感じ。西沢さんはもうちょっと生命感を大事にする人だし。それぞれのこだわりがあってそれぞれの本性があるので。それを間違って掴んでいっていると、うまくいかないわけ。自分の本性をどうやって知っていくかっていうプロセスが大学なんだよね。そこに集中しなきゃいけないんだよ。

だから失敗したって全然構わないわけです。何かうまいものを作ろうっていう気持ちがいけないんだよね。本当は大学は、一生懸命自分が好きなこととか、これなら負けないってこととかを追求していく場所であって、画家だってそうだろう。カラリストかデッサンの人かっていうのは、絵画やってるからって全員同じ人じゃないんだよ。絵が上手いって言ったってそれぞれの人はみんな違うわけだよ。そこをちゃんと人に騙されずに自分で自覚していけるかっていうとこが、大学教育だと僕は思うんだよね。それができればいいんだよ。自分の好きなことをやらなきゃ上手くいかないんだよ。自分が追求して面白い面白いと思って、これだったら苦しいけど面白いっていう道でしか人間は成長していかないんだよな。社会的に重要だからこれやっとかなきゃいけないのかなって自分をずっと曲げてやっていくと、変なとこ行っちゃうわけだよ。自分の本性みたいなことが見えなくなっちゃうわけだよ。

大学院に行くのも考えものなんだよ。卒業して2年ぐらいというのはとても重要な時なんだよね。だから大学院に行ってぶらぶらしちゃうともものにならない可能性はあるんだよ。僕たちの学生の頃は大学院に行く人は学者になる人だったね。構造の人とか。だから東大ではデザインやる人はみんなすぐ学部で社会に出て行ったよね。伊東豊雄さんも学部で出て行ったし、デザインやってる人っていうのは全員、クリエーティブな人はあまり大学院には行かなかった。僕たちの頃も留学して行って戻ってきて…ってやっているうちに30ぐらいになっちゃうと、学部を卒業した人は4〜5年ぐらいしたらもうすごく実務とかできるじゃない。ドローイングが詳細図とか、一応出来るようになる。そうすると戻ってきて30ぐらいで事務所で一からやろうとすると人に聞くことが恥ずかしくなっちゃって、そういうことやらなくなっちゃうんだよね。同年代の人ができるのに自分ができないとかがコンプレックスになっちゃうと、結局建築家にはならない。今はみんな大学院に行くのが予定のコースみたいに思っているけれど、それはちょっと危惧しています。

大学院に行くなら、大学院では先生の生き様みたいなものを学んできちんとした学問をやった方がいいんだよね。本を読んだりとか、ちゃんとした勉強だよな。**ちゃんと勉強しないと駄目ですよ。ちょうど25くらいまでは大事な時期なんだよね。**それ以降本を読んだりするチャンスというのはほとんどないですからね。就職するとすぐ仕事してもらわないと困るでしょ。本当はすごく重要な時期なんだけれど、もっと打ち込んでやった方がいいような感じがする。先生とも深く付き合った方がいいと思うんだよね。

普通のことをやって ちょっといいものをつくり続ける

――富永さんが若い時は日本が上り調子で、建築をつくる機運が今より強くて、ただ今は下り調子になり、当時を知る富永さんは今の建築をどう考えていますか。

富永　今の現状を見るとやっぱり建築の時代ではないよね。僕たちの世代っていうのはみんなちょうど1960年代、こないだのオリンピックがあった時に僕が18歳か19歳くらいで、代々木体育館ができてみんな建築ってすごい力を持っているんだなって思って。感銘を受けたというか、背筋が寒くなったっていう感動がありました。丹下先生の建築ってそういうとこがあるんだよな。東京カテドラルとかも入ると背筋が伸びるような感じがしたよね。それは建築でしか表せない街に対しての力だと思う。そういうところでみんな建築家になって、そういう力を持った建築、場に働きかける力はすごいと思った。今でもすごいですけどね。あれ（代々木体育

館）がない時、荒野だったからね。ボーンって建ったら、全体の空気が1キロ四方ぐらい全然変わっちゃったでしょ。だから建築って凄いなっていう感じがしたんだね。

ただ今回のはある種の政治的なマターとして建築が作られてる。建築の専門家っていうものがちゃんとした専門的な役割を果たしていないわけです。政治家に変な顔されたくない。だから建築家の社会に対する職能が働いていないわけですね。ちゃんと知らしめてないわけですよね。昔は岸田日出刀っていう建築家が、全部の采配を振るったわけですよ。これは丹下、これは芦原、これは菊竹とかいうふうにして。それは自分が得するとか損するとかそういう話じゃなくて、世の中に良いものというか、この機会に建築として場所に対して働きかけるものというか。駒沢オリンピック競技場だっていいでしょう?芦原さんが作った一番いい建物なのかもしれないけれど、そういう人に力を振るわせてやるというふうなことが今は全くなされないで、政治的なマターになったわけだよね、建築が。そういう感じだから、建築が黄昏になっていると言うか、スマホの画面に没入して建築家の力っていうのは信用していない。アーキテクチャリティを信用していない。だからもうちょっとやっぱり高邁な精神でやってほしいね。若い人の中でもそれが失われてきていますよね。建築家にとっては結構厳しい時代が来ているなっている気がしますね。だけどやっぱり建築が果たしていること、建築でしかできないことっていうものを社会は要求して、それに対してfeeをもらっているわけだからな。そのことにやっぱり敏感になって、そのことを先生も教えないといけないと思うんだよな。

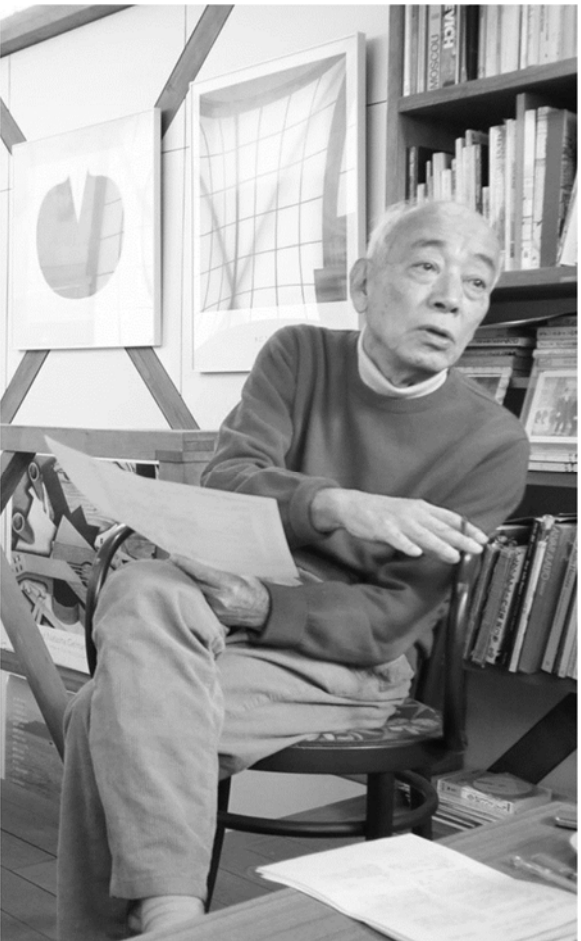
どうすればいいかって言われちゃうと困るなあ(笑)。だけどやっぱり自分のできる範囲の中でそういうことを主張していくことじゃないかな、個人個人が。細かいことですけどね。**建築の仕事って本当はね、普通のことやってても意味のあることはできるんだよ。**ラーメン構造で作っていってもいいものは作れるんだよ。スピリチュアルなものは作れるんだよ。建築家って何か変なことやらなきゃいけないみたいな風になってくると社会的にも信用が失われてくるわけだよね。建築はやっぱりやってみて失敗して、またなんかやってっていう、どんどん自分の領域を広げていく仕事なんだよね。やっぱり自分の経験を豊富にして、価値あるものを作っていくっていう。そして自分が出来る事って、やっぱり自分が一番好きなことなんだよな。それをそれぞれの人が自分で掴むことだよね。自分の一番得意なこととか、これは好きだとか、こういう空間が実現したいとか。やっぱりそれぞれが着実にやって行くことが僕は大事だと思うな。

東京藝術大学の吉村順三さんとか、ああいう人がやったようなことだよね。一軒一軒頼まれても、格別素晴らしいものじゃないけど「なんかいいね、味があるよね」っていう。行ってみるとやはりいいよなーっていう感じのものを、ずっと作り続けられる人っていうのが、すごく少なくなっちゃったんだよな、学生で。そういうことを志望するように先生もあまり指導しない。だけど**ちょっといいもの作るってことは、すごく大変なことなんだよ。**現実にやってみればわかりますよ。そういうことが教育の中で欠けちゃうとまずいなーっていう気がしますよね。だからあなた（小野）なんか評価したわけ。なんかそういう資質を持ってるなと思ったわけだよね。着実に自分の領域を広げていけるような資質を持っているなと思ったわけ。建築的な資質っていうのかな。ドローイングもいいよな。

畝森さんも言ってたよ。あの人はすごい建築のドローイングができるって。図面が良いって。図面って凄い重要なんだよ。図面見ればわかるんだよ、その人の能力みたいなものが。僕なんか色々な学生を見てたけれども、図面見るとわかるんだよ。模型は全然わからない。**なんか図面に込めたものってのが分かるんだよね。楽譜みたいなものなんです。**スピリチュアルなもんなんだよな、図面って。模型重視っていうのはよくないですよ。それが今回は去年よりもちょっと抑えられてきたから、図面をちゃんと描けていたところが、よかったのかもしれないよな。

――それはでもまさに富永さんの影響というか。

富永　そんなことはないですよ(笑)。



設計は一人でずっと考えるのは駄目だ

――妹島さんのような新しい感覚を持った人は、上の世代から理解されなかったりもすると思うんですが、そういう感覚を持った人に期待はあったりしますか。

富永　僕は妹島さんは、尊敬してるし認めてますよ。僕は女子大の時からずっと指導したし、彼女の性格もよく知ってた。さっきも言ったようにすごくやっぱり数学的な頭の精密な人だよね。建築家の性格を持っているなと学生の時からそう思ってました。他でも話したことがあるけど、作品研究を3〜4ヶ月かやりなさいっていう課題を出した時に、彼女はジョン・ヘイダックの建物を研究して、発表したわけ。それは彼女が自分のキャラクターの本質を最初から掴んでいたということです。そのことがすごく大事だって言ったじゃない、学生で自分の本性が何かっていうことをしっかりつかんで、それをずっと離さない人ってすごい珍しいんだよ。あれが面白い、これも面白いってなって、ウケている方向に自分を導いていってしまう人が多いんだけど、**妹島さんは最初から「自分」っていうものをしっかり掴んでいた。**自分の好きなもの嫌いなもの、受け付けられない物っていうのをある種の生理的な嫌悪感とか、そういうところがあったよね。それを伊東豊雄さんに聞いた時、妹島さんが伊東事務所にいた時もそうだったって言ってた。僕と伊東さんの対談でこれは「富永譲・建築の構成から風景の生成へ（鹿島出版会）」という本を引用しますが。

富永「一つ聞いてもいいでしょうか。妹島さんは伊東事務所でどんな所員だったんですか。僕も妹島さんとは若い頃から関わり合いがあったので、気になっているんですが。」

伊東「あの人がライバルになるとは思っていませんでしたよ。今じゃあライバル以上、彼女の方が人気あるからやばいですよ。中野本町を妹島さんがまだ大学生の頃見に来たんです。それがとても気に入ったようで、すぐうちの事務所で働きたいって言ってきて、学生のうちからアルバイトすることになったんです。彼女は図面が下手ですからね。」

富永「色々なことをやる上で器用ではありませんでしたね。しかし思い込んで突っ走る追及力がとても強かった。」

伊東「あの人の1番良いところは意見がはっきりしていたことです。」

富永　ということは自分を掴んでいたということですよ。

伊東「うちの事務所は当時十数人もスタッフがいて、月曜日の朝に全員でプロジェクトの進捗具合を報告していました。その時に彼女は、そのプロジェクトに対しても『これは好きです』『これはいいと思います』『これは駄目だと思います』とはっきり言う。それ以上の言葉はあまりないけれど、それだけは常にはっきりしていました。事務所を辞めてからしばらくは夜にうちの事務所を訪ねてきて、自分のプロジェクトに対してベテランのスタッフに意見を求めていたそうです。さすがに僕には聞いてこなかったですけどね。」

富永「そうそう。案が出来上がると学生時代の友人にも電話をかけて会いに行き、意見をもらっていたようです。こうした行動力もやはりすごいですね」

伊東「そうやって自分の考えを整理していくのはなかなかできない。だから今の学生に言いたいのは、**『設計するときに一人でずっと考えるのは駄目だ』ということです。**友達でも誰でもいいから意見を聞いて、人と話しながらものを作っていくことはとても大事だと思います。優秀な人の中によく、一人で自分の世界に入って設計する人がいますが、そういうタイプの人はいい建築家になってないような気がします。特に今のような時代は。」

富永　って言ってるんだよね。それは一貫してるんだろうな。だからとっても強い人だね。僕はすごいなと思うのは、男だったら裁判沙汰になったり漏水したりいろんなことをしたら、それを反省して変わっていっちゃうと思う、スタイルが。だけどそういうことにめげないような、図太いところもあるんだと思う。ジャンヌダルクみたいなところがあるんじゃないの。男は、社会的にやっぱり追い詰められるとそうはならないよ。彼女はそういうところは強い。

　それと一方で感じるのは、**社会的ないわゆる礼儀みたいなことは、すごくちゃんとしてる人です。**彼女は高橋公子先生の研究室にいて、高橋公子先生から妹島さんを指導してくれって言われたんです。卒業論文と修士論文。それでコルビジェのカーブについての指導したんだけど。高橋公子先生が早々と癌で亡くなって。その時自宅にすぐかけつけたら、妹島さんも来ていて、ずっと横に居ましたよね。僕に対しても、僕からしたら妹島先生なんだけど(笑)、富永先生、富永先生ってずっとそういうふうに言うからね、そういう図太さとか、すごい度胸のある人なんだけど、生活的な社会的な事がちゃんとしてる人だなと思って。それは付き合った人はみんなそういうところを感じるんじゃない。そこが社会的に成熟した人なんだよ。信念もあるし自分をしっかり掴んでるんだと思うな。自分が何が好きで何だったら一生取り組めるか、自分が打ち込めてこれならやっていける、というようなものを持ってるわけだよ。得意なことを絶対やらなきゃダメだよ。自分がこれをやったら大失敗しても後悔しない、みたいなことを見つける場所ですから大学は。

　だから賞をもらったから良いとか、そんな話とは全然違うことなんだ。卒業設計をやるときに、せんだいメディアテークのコンテストでこれが受けたからこういうことをやればいいんじゃないか、みたいな感じでやっちゃったら、もう終わりなんだよな最初から。志がダメなんだよそういう人は。自分っていうのを捨てて、社会

的にはこんなことやっておけばいいんじゃないかな、という感じになっちゃったら、もう卒業設計なんてやる意味ないんだよ。そのことを去年の卒業設計の作品集で言ったわけだよ。自分の本性というもの探求するところじゃなきゃ。

だから本をもっと読まなきゃダメなんだよ、本当は。みんな本を読まないじゃない。情報をネットで漁ってるけどさ。自分が面白いことをやらないで、なんで学校なんか来るのかなって思うんだよね。それを探求する道として、学校へ来るっていうこともあるし、放浪旅行してヨーロッパ歩いてっていうことだっていいわけだよ。いい建築見て「俺はどうしてアルヴァロシザが好きなんだろう」とか。いろんなものを見たけどこれが良かった、とか、そういうことを掴んでいれば、それはすごい大きいことなんだよ。そういうことが教育だからね。社会に出たら自分の力で打って出てやるわけですから、いろんな障害があるし。そこの精神というか、目指すところが卒業設計では大事だと思うんだよね。自分というものを探求するとっかかりみたいにするっていう。みんなが学びの段階にあるっていうことがわからないとさ。それは何だってそうでしょ。最初はよちよち歩きみたいな感じで出てきて、それで建築やってるわけだからさ。学ぶプロセスにあるっていうことを、大学院ぐらいまではよく知っていないと。

だから大学院の時代ってものすごく大事ですよ。年齢的には２５〜３０くらいまでがすごく大事ですよ。そのぐらいまでに本読んだり、いろんな自分の適性を探求したりっていうことがすごく大事ですよ。そのことを社会への準備期間だからって言って、だらだら生きていたり、バイトしたりして、不意にしちゃったらもったいないですよ。そういう意味じゃ僕たちの世代は伊東豊雄さんとか、大学を出たらすぐ実社会に出たわけだよ。実社会に出たら訳分からないことをやらされて、えらい苦労するわけですよ、何も知らない人が。その苦労っていうのが自分を知るためには結構大事なんだよね、最初の段階では。

妹島さんのことを話してたんだっけ(笑)。妹島さんについては一貫して自分の道を突き進んで、いろんな障害がありながら、今の時代ちゃんとやっている人は少ないですよ、日本の建築家ではね。だから今見渡すと自分の思ったことや感性をずっと貫き通して、社会的にもある種の名声を得て、そういう環境にあるじゃない、世界的にも認められているし。すごいえらいと言うか我慢強いところがあるんでしょうね。一作一作創ったものはやっぱり質が高いんだよね。僕この前大阪芸大の建築を見てきたけど、いいですよ。やっぱりだんだん良くなってるよ。今まで時には現実の要求を無視して綺麗なものを作っていたけれど、現実条件を入れながら、非常に難しいプログラムを成り立たせて、あれだけのものを作れるっていうのは、成長して自分の領域を広げてきているのだと思います。

――ありがとうございました。

富永讓

１９４３年　台北生まれ
１９６７年　東京大学工学部建築学科卒業
　　卒業計画賞受賞
１９６７〜７２　菊竹清訓建築設計事務所勤務
１９７２年　フォルム・システム研究所設立
１９７３〜７９　東京大学建築学科助手
２００２〜１４　法政大学建築学科教授
現在　法政大学名誉教授
　　横浜国立大学非常勤講師
今までに日本女子大学、東京大学、早稲田大学、東京藝術大学、武蔵野美術大学、他で教える。